

団地集会所改修プロジェクトを通じた実践的生活環境学教育の試み

Practical human environmental sciences education through the apartment housing complex site meeting place renovation project

鎌田 誠史 武庫川女子大学 准教授

Seishi Kamata

Associate Professor,
Mukogawa Women's University



図1 第2集会所おひろめ会での集合写真

概要

芦屋浜シーサイドタウンの高層住宅地区第2集会所における改修計画への企画・設計・施工にわたる学生の参加を通じて、空間デザインやコミュニティデザインを実践的に学ぶ機会を提供する域学連携の教育プログラムの実施内容についての報告である。

1. はじめに

本稿で報告するプロジェクトは、芦屋浜シーサイドタウンの高層住宅地区にある第2集会所の改修計画への企画・設計・施工にわたる学生の参加を通じて、リノベーションデザインやコミュニティデザインを実践的に学ぶとともに、地域との協働で

デザインを行う楽しさや難しさ、社会的意義などを体験的に考える機会を提供する域学連携の教育プログラムとして実施したものである。

2. 芦屋浜高層住宅地区について

兵庫県芦屋市の芦屋浜シーサイドタウンは、芦屋川と宮川の河口を埋め立てて開発された総面積125haのニュータウンである。高層住宅地区（図2）は埋立地の中央部の20haに位置し、国家プロジェクトとして兵庫県が主導して計画・開発され、昭和54（1979）年3月に入居が開始された。当時としては先進的なアイデアが盛り込まれた高層住宅として注目を集めた。その技術的アイデアはASTMグループ（竹中工務店、新日本製鐵、

キーワード：団地再生、リノベーション、生活環境学、実践的

松下電工，松下興産，高砂熱学）によって計画された。住宅ユニットのプレキャスト化による部品部材の標準化や地域暖房給湯システムの導入，真空ゴミ収集システムの整備など時代を先取りした多くの試みがなされてきた¹⁾。しかし震災や少子・高齢化の波を受けて空き室の増加や近隣幼稚園の廃園など問題を抱えている。



図2 芦屋浜高層住宅（筆者撮影）

を形成するための「場」として集会所を位置づけて，企画段階から工事に至る全プロセスにおいて，住民参加型ワークショップを織り交ぜながら，住民が場づくりに参加できる機会を設けることを提案した。住民と学生が協働することで新たな団地コミュニティの担い手の発掘や住民が集会所を楽しく使うための新たなルールづくりなどの必要性も検討された。



図3 改修前の第2集会所（筆者撮影）

3. プロジェクト実施の経緯

高層住宅の管理事業者である兵庫県住宅供給公社（以下，公社）から武庫川女子大学教育研究社会連携推進室を通じて鎌田研究室（住環境・地域デザイン研究室）に芦屋浜高層住宅地区第2集会所改修計画の企画・設計依頼があった。ゼミ生を中心に生活環境学科と生活造形学科の学生と団地の住民（芦屋浜自治連合会），公社との連携プロジェクトとしてスタートした。

企画・設計については筆者が監修し，大学の教育研究社会連携推進室の大坪明室長の協力を得た。2016年8月にプロジェクトがスタートし，2017年4月に改修が完了して現在は引き続き集会所を拠点としたコミュニティマネジメントを実施している。

4. プロジェクトの内容

4-1 プロジェクトの概要（活動内容）

高層団地地区内には6箇所の集会所があり，本稿で対象となるのは第2集会所である（図3）。集会所の前には広場があり会議や地区内のイベントに使用されてはいたが普段はあまり使用されておらず閑散としていた。さらに2016年には少子化の影響を受けて近隣の幼稚園が廃園となった。芦屋浜自治連合会（以下，自治会）は幼稚園から不要となった約2,000冊の絵本を譲り受けたので，自治会からは第2集会所の改修に際してこの絵本を活用したかたちで子供や子育て世代の集まる場をつくりたいとの要望があがっていた。

このような要望を受けて，現在の主な利用者であるシニア世代に加えて子供や子育て世代が快適に居住できる住環境の再生に寄与する場づくりを再生のコンセプトとした。空間デザインは学生が主体として行うが単なる空間デザインに終わらずの

4-2 改修計画の作成

(1) プロジェクトの組織

プロジェクト開始当初は公社（11名）を事業主として，住民側から自治会（9名），大学側から生活環境学科（17名）と教員（2名），サポートメンバーとして団地再生コーディネーター²⁾（1名）が検討メンバーとして組織された。オブザーバーとして，数々の団地再生や改修事例を持つ工務店（株）フロッグハウス（2名），芦屋市を拠点にシニア世代や子育て支援などを行っている特定非営利活動法人さんびいす（2名），芦屋市建設部建築指導課（1名），芦屋市都市建設住宅課（1名），兵庫県住宅政策課住宅政策班（1名）が加わりプロジェクトがスタートした。

(2) 域学連携会議

1) 情報の共有

プロジェクトは検討メンバーで構成された全体会議（域学連携会議）を通じて進められた。2016年8月16日に第1回域学連携会議が開催され，自治会から前述した近隣の幼稚園廃園に伴い譲り受けた約2,000冊の絵本の活用についての意向，団地内の少子・高齢化に伴う集会所利用率の低下などの課題について共有した。公社からは団地全体の事業（修繕）計画の説明，修繕の一環として当該プロジェクトとは別に実施予定の集会所外壁および屋根改修についての説明，当該プロジェクトの事業費についての説明を行った。大学からは大坪教授から芦屋浜シーサイドタウンや高層住宅地区の概要や団地再生の手法などについてレクチャーを受け，学生を含めメンバー全員で情報共有を行った。

2) 改修計画の検討

第1回域学連携会議（図4）において集会所改修計画を検討

メンバーがワークショップ形式で検討を進めることが決定した。その中で学生がワークショップのファシリテータとなり、参加者と改修案を考え・まとめ・発表し、次回の域学連携会議で学生が立案しながら提案を重ねていく手法をとった。ただし当時3年生を中心とした学生メンバーにはワークショップ経験者がいなかったため筆者がワークショップの進め方についてレクチャーし、模擬ワークショップを行うところからスタートした。



図4 第1回域学連携会議（井上氏撮影）

第2回域学連携会議以降はワークショップ形式（図5，図6，図7）で進められた。学生をファシリテータやタイムキーパーとして進めることに不安もあったが，参加メンバーの中にはワークショップ経験が豊富なメンバーもあり，学生はサポートを受けながらそれぞれの役割をしっかりと果たすことができていた。ワークショップでは主にプロジェクトのテーマについて検討し，その中でプロジェクト名が「またあしたプロジェクト」に決定した。これは「またあしたも誰かがそばにいてくれるように」との思いをこめたもので，学生案が採用された。

このようなワークショップは6回実施（表1）され，学生は住民のおもいを引き出すことをとくに重視しながらワークショップを進めた。参加した住民の多くはシニア世代だったこともあり，学生の意図が伝わらなかったり，進行がうまくいかず計画通りに進まないこともあったりしたが，そのたびに修正を繰り返しながら最終提案（図8，図9）へとつなげていった。



図5 ワークショップ（筆者撮影）



図6 学生による発表（筆者撮影）



図7 学生による発表（筆者撮影）



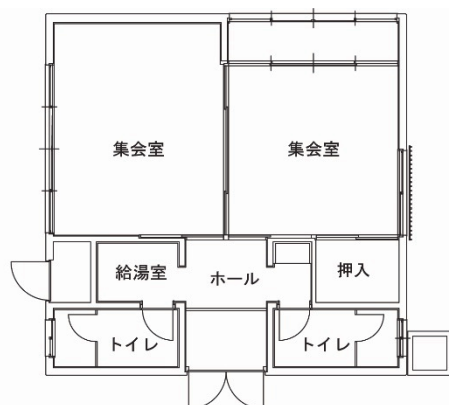
図8 学生による提案模型（奥野撮影）

3) 改修計画作成を通じた課題

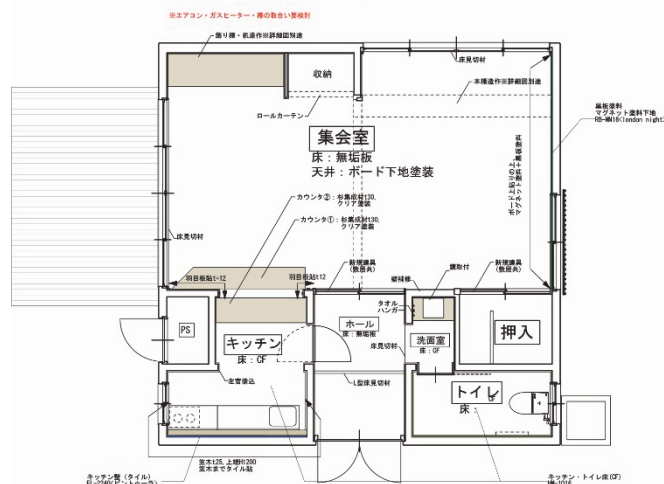
計画の作成は当時の3年生を中心に検討を行った。毎週のゼミ時に学生が検討した案に対して，ディスカッションを通じて改善点を明らかにして次の域学連携会議でのワークショップに向けて案を作成した。研究室以外の学生も当初は参加していたが，具体的な作業を進めるにつれ，研究室メンバーが中心に作

表1 プロジェクトのフロー（作成：奥野）

	2016年 8月	9月	10月	11月	12月	2017年 1月	2月	3月	4月
住民参加型 ワークショップ (WS)	① 8/19	② 9/29	③ 11/3	④ 12/1	⑤ 1/12	⑥ 2/15	⑦ 3/10	⑧ 3/18.25	⑨ 4/6 ⑩ 4/15.16
検討・内容	理念			空間デザイン		リノベーション工事 コミュニティマネジメント			
	① <キックオフ> 戸塚団地移妻 活動の流れ 現状確認	② <第1回WS> 基本理念 集会所の使い方提案	③ <第2回WS> テーマ・空間イメージ の提案 事例の提示 →実現するための方法論	④ <第3回WS> 案の決定 図面・模型による説明	⑤ <第4回WS> 工事内容説明 住民の巻き込み方 ルールづくりについて	⑥ <第5回WS> 工事内容説明 集会所前広場の使い方 DIYイベントについて オープニングイベントにむけて	⑦ <第6回WS> 工事進捗状況 オープニングイベントについて	⑧ <DIYWS> ペイントパーティ ウッドデッキDIY おひるめ会の告知	⑨ <会議> イベント詳細 当日の流れ
								⑩ <おひるめ会> 飾り付け セレモニー 集台 アンケート	



平面図（改修前）



平面図（計画）

図9 学生による提案図面（作成：鎌田研究室）

業を進めるようになった。これは毎週のゼミ時に検討していたこともあり、学生のスケジュール調整が難しかったことも要因であるとする。また、研究室メンバーで進めていく際にも共同・分担作業が必要となる。共同・分担作業には一人あたりの負担軽減や視点・アイデアの多様性等のメリットがある一方で、個々の能力に応じて作業の速度や質にばらつきがあり負担も偏りも生じやすい。これらの問題に対して設計能力の高い学生とマネジメント能力の高い学生を一名ずつプロジェクトリーダー

に選出し、チームを牽引する役割を担わせ、チーム運営を学生自身によって行えるようにした。結果として学生全員で集まって作業する日を作ったり、分担作業を割り振ったりと工夫をして提案作業は進んでいたが、リーダーに作業が集中して負担や偏りといった点は解消できなかった。

4) 改修計画の概要

学生は試行錯誤を繰り返しながら改修案をまとめて住民や公社のコンセンサスを得ることができた。改修前の第2集会所は7m×7mのRC造平屋の建築である。2間つづきの集会室、男女トイレ、倉庫、給湯室、玄関及び玄関ホールからなる平面構成であった。

改修の基本条件是検討を経て、以下の5点に整理された（図9）。

- ① 絵本約2,000冊を活用した子育て世代や子供にも利用できる室内とする。
- ② 2間つづきの集会室の間取りや広さを変えずに既設の天井を外して小屋現しとすることで、空間に広がりを持たせる。
- ③ トイレは既設の男女別々を1箇所に集約し段差のない多目的トイレとする。既設トイレ1箇所と既設給湯室をカウンター付キッチンに改修して、子供食堂や料理教室などの活用が可能な空間とする。
- ④ 東側の広場に面してウッドデッキを設けて集会所と広場をつなげる。広場には絵本が収納できる倉庫を新設する。
- ⑤ 改修工事は工務店が行うが、学生も施工に参加しさらに室内の塗装やDIYワークショップを開催して住民参加を促す。

4-3 改修工事の実施

(1) 施工と体制

工事は（株）フロッグハウスが公社から受注して行った。学生は研究室や他研究室、下級生の33名が新たに組織された。これは研究室のリーダー2名が自身で考えてメンバーを再度つくりDIYに興味のある学生を集めた。学生は工事期間中の6日間大工の指導のもと延べ40名が工事に参加した（図10）。

(2) DIYワークショップ

DIYワークショップは2回実施した。3月18日にはペイントパーティを題した集会所の内壁の塗装を子供たちと学生が実施

する企画を実施した（図11）。塗装前の壁には自由に落書きができるといった遊び要素を入れることで子供が参加しやすい企画内容となっている。企画・運営とも学生が行い、数多くの子供とその親が参加して盛況であった。3月25日にはDIYイベントと題したウッドデッキづくりを体験する企画を実施した（図12）。大工の指導のもと行ったこの企画にはペイントパーティほどの参加はみられなかったが、参加した子供たちは学生と楽しそうに作業をしていた。ペイントパーティが盛況だった理由としては、落書きやペイントなど気軽に参加して遊べる企画が良かったと言える。



図10 学生による施工風景（写真提供：フログハウス）



図11 ペイントパーティ（写真提供：フログハウス）



図12 DIYイベント（写真提供：フログハウス）

(3) 改修を通じた教育的効果

改修の企画・設計は学生が全て関わることができた。改修工事は工務店が実施したが、材料選定や家具のデザイン、その他仕上げの検討は学生が行った。ただし、ほぼすべての作業において学生は工務店のサポートを受けており、このようなサポートがなければ検討作業は困難であったといえる。

学生は施工に際して、自身のデザインが実際に形になることへの恐さを感じながら学生自身が設計した内容を施工することでわかるデザインの意味や重要性、共同作業のマネジメントの難しさ等について体験的な学びが得られたといえる。ただし、今回の改修工事には6日間という短期間の参加であったため、施工作業における材料や施工の技術的な知識を取得できたとは言い難い。

しかし、学生の提案により改修工事自体を住民参加型ワークショップとして企画するなど、学生自身で考え企画提案する力を得たことは大きな教育的効果があったといえる。一方で設計や作業を通じて学生自身が痛切に感じたのは、共同作業において作業を円滑にかつ質を高く保ちながら進めていくための人のマネジメントがいかに難しいかについてであった。

5. 竣工後 — 団地のあらたな場としての活用

工事が完了する前に、新しく生まれ変わった第2集会所を広く住民に知ってもらうための企画として「第2集会所おひろめ会」が学生によって企画された。告知用のポスターを学生が作成し、準備は公社と自治会と学生が協力しながら行った。

2017年4月16日に第2集会所でおひろめ会が開催された。自治会からはテントや屋台も準備され、学生ははじめて焼きたい焼きに奮闘していた。学生企画としては住民の子どもたちと集会所の飾りつけを行った。参加者は200人以上におよび集会所のあらたな「場」としての活用の初の事例となった。

現在、第2集会所は毎週水曜日に金曜に解放されている。特別に宣伝していないため、利用頻度はまだ高くはないようだが無理せず徐々に住民に馴染んでいくことが期待される。集会所の使用については料金が発生するため自治会が料金を支払って住民に開放している。住民のための使用については無料にするなど今後の規約改定の課題といえる。

なお、第2集会所おひろめ会の開催時に「またあしたサポーター」として集会所運営サポーターを募集したところ10名以上の応募があり、サポートや運営のあり方について検討が行われている。このような動きがあらたな「場」をつくっていく原動力になると考える。さらに、今年度は特定非営利活動法人さんびすが応募した兵庫県の補助事業「①シニア世代から子育て世代へのふるさと伝承事業、②地域祖父母モデル事業」が採択され、団地の子どもたちとシニア世代をつなぐさまざまな試みが実施されることが決定した。武庫川女子大学鎌田研究室では、県民センターの補助事業「高層団地の集会所を拠点とした持続可能な多世代共助コミュニティの育成」が採択され、第2集会所での絵本の読み聞かせや住民参加型アートワークショップを

通じた多世代交流や住民のマッチングなどの試みが実施されることが決定し、各関係機関と地域住民、そして学生が協働しながらあらたな「場」のデザインを引き続き進めていく（図13、図14）。



図13 竣工写真（写真提供：フロッグハウス）



図14 改修後の集会所（筆者撮影）

6. まとめ

6-1 教育的効果

第2集会所改修プロジェクト（またあしたプロジェクト）を通して得られた教育的効果は、以下のようにまとめられる。

- ① 学生が住民や事業主等との打ち合わせやワークショップを含む、プロジェクト全体に関与することによる学び。
- ② 住民参加型ワークショップの企画・運営を通じて意見を集約し設計やコミュニティデザインにまとめるプロセスに関する体験的学び。
- ③ 自身が設計した内容が実際に施工されることによる設計行為の意味や重要性に関する学び。
- ④ 参加学生の主体性の重要性やメンバー間の情報共有、学生同士や関係者との人的マネジメントに関する学び。
- ⑤ 建築の改修があらたな「場」として生まれ変わることで持続可能な交流拠点となるためのコミュニティマネジメントの重要性に関する学び。

課題や設計条件があらかじめ決められた通常の授業と異なり、実際の社会では建物の現状の把握や、住民や関係者との打ち合わせやワークショップを通じて、問題点を自ら発見し計画条件を設定しながらさらに柔軟に変更や調整していくことが求められる。そのような社会で実際に行われる一連の計画プロセスを体験できたことは意義深いといえる。このようなプロジェクトは大学のカリキュラム上の単位認定とは無関係である。また研究室での多少のしぼりはあるものの参加を強制するものではない。学生は単位や成績のためではなく、プロジェクトに価値を見出し、作業に時間と労力を費やしている。通常の授業に加えて学生が社会とつながるこのような社会的意義のあるプロジェクトを行うことは大学にとっても教員にとっても重要な役割である。

6-2 社会的意義

企画・設計・ワークショップ・施工のプロセスに多くの学生が長く関わることで、そのこと自体がコミュニティ形成のきっかけになる点は社会的意義の一つであろう。ひとつの改修を契機として、団地の住民の「場」が生まれ、さらに多世代が交流可能な「場」となるような取り組みが予定されている。引き続き持続可能な交流の場としてコミュニティマネジメントに学生が関わることで、単なる空間デザインでは得られない学びが期待される。このような動きは学生が継続的に関わってきた成果の一つと言ってよい。

謝辞

このようなプロジェクトに学生が参画できたのは、第一に住民の方々の寛大な理解があつて初めて実現できたものである。とくに大永会長をはじめとする芦屋浜自治連合会の皆様には忍耐強く学生の提案を聞き、受け入れていただき心から感謝したい。そして事業主の兵庫県住宅供給公社のマネジメントがなければ決して完成しなかった。神吉主査にはプロジェクト全体のマネジメントをしていただいた。またプロジェクトは兵庫県の補助を受けて団地再生コーディネーター派遣をいただいている。ここに記して感謝の意を表したい。

注及び参考文献

- 1) 角野幸博：高層住宅から戸建住宅まで揃えた実験都市芦屋浜シーサイドタウン（兵庫県芦屋市），まちなみ48, 52-59, 2003
- 2) 当該プロジェクトは兵庫県の補助を受けてニュータウン再生コーディネーター3名の派遣を受けている。その内2名は武庫川女子大学の教員（大坪教授，筆者）と堀内氏（元UR武庫川団地管理官）である。